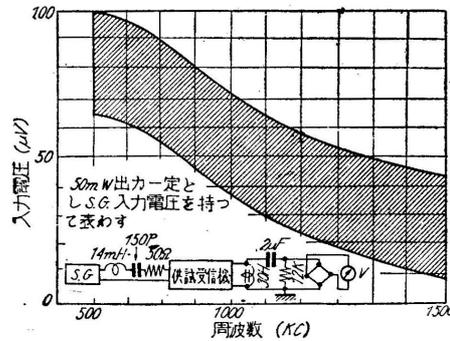
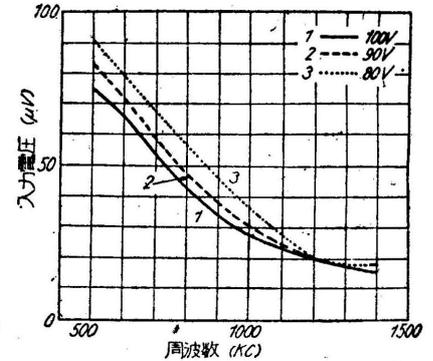


り、種々実験の結果発振コンデンサーに 250PF を使用いたしておりますのでライン電圧 50V(AC) で発振を開始し、第 2 図のとおり電圧の変動による感度差は極めて僅少であります。これに併せてケミコンと真空管保安を考え、第 1 図に記入したとおり非常に低い電圧としておるのも本機の特徴であります。従ってピーク電圧もケミコンの許容電圧以下であり、 S_g 電圧も 50 数 V で、一般の常識以下の値をとっておりますが、極めて安定で故障もなく第 3 図に示しますとおり 50mW 出力においてアンテナ入力数 $10\mu V$ の感度を有しております。

〔取扱に就て〕本器は前述の通り各部電圧が低く「ダイヤトーン」P.M. スピーカーがやや能率が低いので、音響出力は多少少い欠点がありますが、パワー・トランスの容量は充分大きく取っておりますから、電蓄等に使用する場合に UZ42 と KX80BK に挿換可能であります。PU を使用する場合ターミナルのショート金具をはずし、プレーヤーにやゝ不便ですが、切替スイッチを取付けでき得



第 2 図 C 型感度規格



第 3 図 C 型電源変動に対する感度測定

ればレコード演奏時にはラジオ出力側を接地していただきたいと存じます。本器は非常に高感度であり、6WC5 には AVC を掛けておりませんので余程電界強度の弱い地区でない限り、電灯線アンテナは絶対に避け、やはり数米の室内アンテナをお薦めいたします。我々は生産の各工程に於てあらゆる部品に「部品メーカー泣かせ」とまでいわれる程の厳確な検査を行い、完成セットは 20 時間のエージング後に総合検査をして出荷いたしておりますので、「手前味噌」でなく事実故障率極めて低くこれといって修理に関して御注意願う点もありませんが、キャビネットの底板を取去るとそのまゝ内部点検ができますから御利用下さい。前記の如き設計方針であるため部品のライフは半永久的と考えられますが、それでも真空管はその性質上一応ライフを考えなくてはなりません。最近の NEC の特性は極めて良好で満足すべき真空管で、その均一性も充分ありライフも 2000 時間を標準とされておりますが今までの経験では寿命の切れる順序は 6ZP1, 6WC5 の順のようでありますから修理の際、まず一応真空管をチェックしていただきたいと存じます。其外 C_2 の容量ぬげがありますがこの場合は特異の低周波発振音を生じます。又最近某メーカーの L コンと称する新製品を結合コンデンサーとして数百台に使用し出荷後にその経年変化に対し疑問を生じており、只今は使用中止いたしました。当時のセットの出廻った地区で万一故障を生じておるかもしれません。その他パイロット豆球の断線が多く非常に御迷惑お掛けしておりますが、我々といたしましてもこの点実に苦心いたしておりますが仲々良い物がなく、せめてものサービスとして昨年末の製品からはパイロットソケットをクリップにしてダイヤル板に挟む様にいたしましたので簡単に引出し交換できる様改良いたしました。再調整の必要の場合トラッキングは 550KC 1000KC 1400KC の三点で行っていただきたいと存じます。勿論 IFT は 463KC を使用しております。

Model MS-1950D

〔沿革〕本機は昨年 1950 年型として前記 MS-5C 型を基として設計せられ、昨年末に発表され逐次前二者と切換るべく一応高級 5 球スーパーの条件を具えている新製品であります。

〔回路並設計の方針〕第 4 図に示すとおり UZ42, KX80BK を使用した以外大体前述の C 型と同様で設計も大同小異であります。部品配置は改悪の気味があるが真空管の交換の便を考慮して一列に並べました。配線法は写真¹にて解る通り一本のラグプレートに大部分の配線が完了して終う方式を採用してみました。マスプロのスピードアップには好結果でしたが修理の場合配線の見難い怨みがあると存じますので第 6 図にこの部分の詳細を示して置きます。音質調整は第 7 図の回路で行っております。

VR を A 点に回転しますと C(42 カソード～A 間) が容量が小さい為高音でフィードバックの量が減少しますので

¹ 原記事には写真は掲載されていない 編者注

